

Title	「ハイピリアン」と「ハイピリアンの没落」の同一性と差異性：(3)「ハイピリアン」独自の詩行について その1
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 1979, 18, p. 87-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25693">https://doi.org/10.18910/25693</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性

——(3)「ハイピアリアン」独自の詩行について——その1

安藤幸江

はじめに

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性という題目で、(1) テーマについて、(2) 共通の詩行について——その1からその5まで、書いてきました。<sup>1)</sup> 本稿では「ハイピアリアン」独自の詩行について論議します。限られた紙面では独自の詩行の全部は検討できませんので、第二巻、1-166行までとします。便宜上、二節に分けます。

## 1

「ハイピアリアン」第二巻、1-100行

ここはサターン、スィーア、ハイピアリアン以外の傷ついたタイタン達とサターンの妻、シビリーが没落の苦しみにもだえているところです。

本題に入る前にシビリーについて述べますと、彼女はオプス (Ops) やレア (Rhea) と同一視され、サターンの妻であり、タイタン達とはきょうだいです。さらにジュピターをおとこ頭とするオリンポスの神々の母です。そして彼女は神々の母、大地、テラス (Tellus) あるいはガイア (Gaea) と区別されるものです。キーツはシビリーとテラスを区別している箇所もありますが (第二巻、54行と78行)、混同している所もあります。たとえば、第二巻、389行目、“Saturn sat near the mother of the Gods”。この“the mother of the Gods”は神話本来から言えば、テラスですが、キーツの文脈からすれば、シビリーにとれます。また、第二巻、4行目“the bruised Titans”と書き直される前は、“her bruised children”となっていました。

“her bruised children”はタイタン達なのですから，“her”というのは the mother of Titansで、テラスとなります。こういうシビリーとテラスの混同はどこからくるのでしょうか。それは昔から混同して解釈されてきたからです。M. アロットはボールドウィンを引き合いに出しています。

The wife of Saturn is various called Ops and Rhea, and Cybele . . . she also sometimes bears the name of her mother . . . like her she seems likewise to be the Earth, and . . . was invoked by the appellation of . . . *Magna Mater* . . . and Mother of the Gods (40-1)<sup>2)</sup>

こういう混同はローマの作家達からエリザベス朝時代の文学に受け継がれ、キーツの知るところとなったようです。<sup>3)</sup> だからキーツの混同も無理からぬことです。しかし、「没落」の方では、シビリーをサターンの妻、ジュピターの母、タイタン達のきょうだいとはっきりさせています。

Moan, Cybele, moan; for thy pernicious babes ( I , 425)

さて、タイタン達のいる場所の描写ですが、「光がささない」というところを“where no insulting light / Could glimmer”と言っています。これはミルトンの『失楽園』第一巻、181-3 行の影響があると指摘されています。<sup>4)</sup> そこでのミルトンの表現は、

The seat of desolation, voyd of light,  
Save what the glimmering of these livid flames  
Casts pale and dreadful . . .

と、“voyd of light”という平凡な表現です。キーツの“no insulting light”というのは非常に簡潔で要を得た描写で、仲間だけが集まって苦しむ場面にはふさわしいと思います。

光はないのですが、互いの呻き声が聞こえない程の凄い滝の音がしています。

## the solid roar

Of thunderous waterfalls and torrents hoarse,  
Pouring a constant bulk, uncertain where. (7-9)

何千もの滝の音が集まって出す音はまるで大きな塊のように感じられ、それが“solid roar”という素晴らしい表現になったのでしょうか。“solid”を *O. E. D.* で引いてみますと、

Of clouds, the atmosphere, *etc.* : Having the appearance of a solid or unbroken, mass; dense, thick, compact.

Of states, conditions, *etc.* : Characterized by solidity or compactness.

Of rain, *etc.* : Steady, drenching; continuous, also, of a day: Characterized by rain of this kind.

塊のような感じと絶え間ないというのが合わさったような意味になっていると思います。同じような“solid”の使い方が彼の「アポロによせるオード」<sup>5)</sup> にも見られます。

## their adamantyne lyres,

Whose chords are solid rays and twinkle radiant fires. (5-6)

キーツと友人のチャールズ ブラウンは1818年6月25日から徒歩旅行に出かけました。湖水地方を通り、ダンフリースを抜け、7月6日には北アイルランドに行きました。その後スコットランドに戻り、ロバートバーンズの生まれ故郷を見、アール川やドゥーン川を見、高地を渡り、ヘブリディーズに行き、最後8月6日にインヴァネスで終わりました。42日間、642マイルの旅でした。<sup>6)</sup> この旅で彼はロドルの滝 (the Falls of Lodore) を見ましたが、湖水地方に来るまで滝を一度も見ることがありませんでした。従って、滝を見た時のキーツの感動がとても大きいものであったことが想像されます。「ハイピアリアン」の当該箇所イメージはこの旅行で見た滝の姿が増幅されてできたのでしょうか。キーツはアムブレンドのストックギルフォース (Stock Ghyll Force) を描いて次のように言っています。

. . . we . . . saw it streaming down . . . to the depth of near fifty feet . . . the water was divided by a sort of cataract island on whose side burst out a glorious stream—then the thunder and freshness.  
(Letter to Tom Keats, 27 June 1818)

さらに、フィンガルの洞窟の水の音も印象深かったようです。

At the extremity of Fingal's cavé, there is a small perforation into another cave, at which the waters meeting and buffetting each other there is sometimes produced a report as of a cannon.

(Letter to Tom Keats, 26 July 1818)

そしてタイタン達が居る所はごつごつした岩場です。これは又、湖水地方とスコットランド旅行の記憶から生まれました。1818年8月に登ったベンネビス (Ben Nevis) をとり囲む岩場についてキーツは次のように言っています。

Talking of chasms they are the finest wonder of the whole—they appear great rents in the very heart of the mountain though they are not . . . but other huge crags arising round it give the appearance to Nevis of a shattered heart or Core in itself—These Chasms are 1500 feet in depth and are the most tremendous places I have ever seen.  
(Letter to Tom Keats, 3 August 1818)

彼らが坐しているのは玉座ではなくて、固い石ですが、ここにも湖水地方での印象がその下敷となっているようです。アムブルシド (Ambleside) の風景について次のように手紙の中で書いています。

What astonishes me more than any thing is the tone, the coloring, the slate, the stone  
(Letter to Tom Keats, 27 June 1818)

この光もなく暗い、滝の音ばかりする岩場に全ての神が集まっているのではなくて、次にあげる神々は暗い土牢の中に閉じこめられていました。

それらの名を簡単に註釈をつけてあげてみますと、まずコイオス（英語では Coeus, ギリシャ語では Koilos), 彼はフィービー（「輝き」?) と結婚して、間にアステリア（「星空」とレートーという二人の娘を儲けました。このレートーは後にゼウス（ジュピター）の愛を受けて、アポロとアルテミスという有力な二柱の兄妹神を生みます。次に、ギュゲース（Gyges), 百の腕に、五十の頭を持つ巨大、かつ、強剛無比の怪人。ブリアレオース（Briareüs), ギュゲースと同じく百腕の怪人。百腕の怪人は三人おり、もう一人はコッタス（Cottus, 後出）で、三人あわせてヘカトンケイレスと言います。

さらに、タイフォン（Typhon), 台風は、彼が起こし、暴風の名です。ギリシャ神話によれば、タイタン一族を天から追い落して、タルタロスに押しこめ、ジュピター兄弟の統治は確立されたように見えたのですが、大地ガイアは自分の産んだ、タイタンらが地底に幽閉されたことに心安からず、多くの巨人達を産み出して、ジュピター兄弟の主権を脅かそうとしました。これにはいろんな種類のもの、性質のものが混っていますが、一般に包括して、ギガンテス（Gigantes）と呼ばれます。英語の Giants はこれに由来したものです。当該のタイフォンは大地の末子で、

彼は大地の産んだすべての巨大な子たちの中でも、体においても力においても、とびぬけていた。その背丈はどの高山よりも高く、頭髮は星に触れるほどだった。その両腕を開いて延ばすと、一方は東の涯に、他方は西の涯に達し、肩からは百の蛇形をした頭が生えていた。腿から下は巨大な毒蛇のとぐろを巻くごとく、動くたびにしゅうしゅう鳴った。その上、全身に羽根が生えていて、頭と顎からは長髪が風に靡き、眼から火を放ち、百の恐ろしい頭に具わる口は種々さまざまの轟音を発した。<sup>7)</sup>

ドーラ、彼女は、タイタンでもギガンテスでもありませんが、E. De セリンコートによれば *Auctores Mythographi Latini* (ed. Van Staveren, Leyden, 1742) のP. 3に“ex Æthere et Terra, Dolor, Dolus, Ira,” というのがあり、この書物をキーツは1819年に所持していたことをコルピンが証

明しているそうです。<sup>8)</sup> ポルフィリオンは巨人軍の統領でした。

又、さまよっていた神々もいました。ニーモジニー (Mnemosyne)、記憶を意味し、ジュピターの愛を受けたタイタン族の一人で、頭髮の美しい女神です。この女神がタイタンの中に加わったのは、悠久の昔より、すべての人間社会の伝統、すなわち文化を伝える者としてでありました。そして彼女からは、詩歌学芸の司である九人のミューズ達が生まれました。さらにフィービー (Phoebe)、前出のコイオスの妻で、アストリアとレートーの母、すなわち、アポロとアルテミスの祖母です。

しかし、上述以外の大部分の神々は、この岩場を隠れ場所としていました。そしてキーツは一人一人の神々の名をあげて、いかなる姿をして苦しんでいるかその有様を各々描写しています。名をあげますと、まずクレイオス (Creüs)、彼は「海」ポントスの娘、エウリピアーを娶り、間にアストライオス (「星空」)、パラース (冥界の河、スチュクスの夫となる) および、ペルセース (ヘカテの父) の三人の息子を儲けました。

アイアペタス (Iäpetus)、ネーレイスのエイシャー、あるいはクリミニー、一説では姉妹に当るテミスを妻とし、間にアトラス、プロメテウス、エピメテウス、およびメノイティウスを儲けました。コタス (Cottus)、百腕の怪人。エイシャ (Asia)、前述アイアペタスの妻、海神オーシェイナスとテティスの子で、プロメテウスの母。キーツがここで彼女の母として描くカーフはコーカサスにある山の名で、彼は、アジア大陸の名称となったエイシアの母としてカーフを造り上げたようです。<sup>9)</sup> ホープ、希望はヘシオドスの『仕事と日々』に伝えられるパンドーラのかめ (手篋) に最後に残ったものとしてよく知られますが、キーツがここで述べているのは、それとは違って、タイタン族の一人のようにされています。そしてここには、むしろ聖書における希望のイメージが入っているようです。<sup>10)</sup>

エンセラダス (Enceladus)、大音響をたてるものの意で、ギガンテスの中で一番力が強く、狂暴で彼らの頭分です。アトラス (Atlas)、アイアペタスとエイシア、あるいはクリミニー、あるいはテミスとの子。「穹窿

の支柱の番人、あるいは自らその肩に天を支える巨人。しばしば美術や文学にも現われる。古くはアルカディアの、一般には世界の西の涯に連なる高い山が、虚空を支える巨人と見立てられたものであろう。オヴィディウスはペルセウスが例のゴルゴンの首をさしつけてこの巨人を岩とし、それ以来山脈となったとしている。すなわち、アフリカ西北端に連なる山脈名となり、大西洋を Atlantic Ocean というのも彼に因んでいる。<sup>11)</sup>

フォルカス (Phorcus)、海神で、ポントス (海神) とテラスの息子。妹のケートーと結婚するが、その間に生まれた子というのは、ほとんどみな恐ろしい怪物ばかりです。それらは地上の各地方に占拠し、人畜を悩まし、後に神々や英雄たちに殺され、あるいは征服されます。たとえば、エキトナ、スキュレー、セイレーネス、グライアイ、ゴルゴーン達です。

オーシェイナス (Oceanus)、世界をとり巻く大河、大洋の神格化で、彼は次に出るテティスを妻として、多くの子を持っていました。息子としてはその数三千に余る河々の神とオーケニアデス「オーケアノスの娘たち」があり、その数は三千です。その中ではアイアベタスの妻といわれるクリミニーやエイシャなどが有名です。

テミス (Themis)、彼女は「置き定められたもの、掟、法」の義で、ジュピターと結婚しました。この結婚から、季節の女神たち、秩序の女神、運命の三女神等が生まれました。

キーツはこれらの神々について、様々な本から学びました。たとえば、Lempriere, Baldwin, サンディーズ訳の Ovid, *Metamorphosis*, ヘシオドスの *Theogony*, ヒギナスの *Fabulae*, ロンサールの *A Michel de l'Hospital* です。<sup>12)</sup> これらの書物の描写をそのままというよりは、キーツなりにそのイメージをふくらませたと思われます。キーツが彼の知る限りの神々の名前を並べ、まるで神々の名の羅列とも言えるこの箇所の陰鬱な描写は、読者には余り魅力的ではないものですが、後に彼らの前にサターン、そしてハイピリアンが現われることを考えれば、重要な場面であり、省くことのできないものです。



この中で、33-38行の描写、

Scarce images of life, one here, one there,  
Lay vast and edgeways; like a dismal cirque.  
Of Druid stones upon a forlorn moor,  
When the chill rain begins at shut of eve  
In dull November, and their chancel vault,  
The heaven itself, is blinded throughout night.

は、M. アロットも指摘しているように、1818年6月29日ケスウィックから弟トムにあてた手紙の中に見える Druid Temple の影響が感じられます。

we . . . set forth . . . on the Penrith road, to see the Druid temple the prehistoric stone circle at Castlerigg. We had a fag up hill . . . near dinner time, which was rendered void, by the gratification of seeing those aged stones, on a gentle rise in the midst of Mountains, which at that time darkened all round.

(Letter to Keats, 29 June 1818)

このように第二巻冒頭の部分には、スコットランド・湖水地方への徒歩旅行で得られたものが何度もうまく取り入れられています。そして83-100行ではこの神々の苦しむ隠れ場にサターンとスィーアが来たことが述べられます。スィーアはサターンの顔に絶望の色を見ます。

## 2

### 「ハイピアリアン」第二巻、101-166行

我々人間にあって、心に重荷を抱く人は、同じような心の傷を持つ人々の居る悲しみの館館に近づくと、自己の苦悩をさらに深めるものですが、そのようにサターンも悲しみに満ちたこれらタイタン達の隠れ家に踏み入ると気が遠くなるように感じました。キーツはこれまでも、神々のことを述べるのに人間に譬えています。たとえば、ハイピアリアンが没落の恐

怖に震える所,

as among us mortals omens drear  
Fright and perplex, so also shuddered he — (*Hyperion* I, 169-70)

などです。

こうしてサターンは気が遠くなったのですが、エンセラダスの眼に出会  
うと元気を取り戻して、タイタン達に「おまえ達の神を見よ」と叫びます。  
これに対してタイタン達のある者は呻き、ある者は驚いて立ち上り、ある  
者は叫び、ある者は泣きますが、皆、尊敬の念に頭を下げます。

これらタイタン達の中に、冬、松の林を吹く風のようなざわめきが起  
ります。キーツは音に敏感で、特にこのような木立を抜ける風の音、聞こえ  
ては消えてゆく風の音の描写に鋭いものがあります。又、サターンの声を  
オルガンに譬えています。オルガンの調べが空気を銀色に震わせる  
("Leave the din'd air vibrating silverly"), と非常にキーツらしい表現  
を使っています。彼にとって、オルガンはじめ楽器の音色は銀色のイメ  
ージのようです。例をあげてみましょう。

A trumpet's silver voice. Ah! it was fraught	<i>Calidore</i> 55
The silver strings of heavenly harp atween	<i>Early Hour</i> 5
The earnest trumpet spake, and silver thrills	<i>Endymion</i> 4, 197
The silver, snaring trumpets 'gan to chide	<i>St. Agnes Eve</i> 4, 4
A silver trumpet Spenser blows	<i>Ode: Apollo</i> 6, 1

ここ129行から166行まではサターンの言葉ですが、どうしてタイタン達  
が没落の憂き目を見ているのか、その理由がわからないと言っています。  
まずは自分の胸に聞いてもわからないのです。  
次に原初の予言の本を見てもわからないのです。ここ133-138行に、M.  
アロットは次のような註をつけています。

An imaginary book existing from the beginning of time and recording the first stages of the evolution of the world. The description “spirit-leaved” probably derives from allusions to the Sibylline prophetic books encountered in K.’s reading, for example, Virgil’s *Aeneid* iii 443-4,

*insanam vatem aspicias, quae rupe sub ima  
fata canit foliisque notas et nomina mandat . . .*

(‘ . . . thou shalt look on an inspired prophetess, who deep in a rocky cave sings the Fates and entrusts to leaves signs and symbols . . . ’ [Loeb edn].)<sup>13)</sup>

ここで言う “*insanam vatem*” というのは、Sibyl あるいは Sibylla のことです。キーツの言っている書物はこの世の初めから存在する本ですが、これは “Sibylline prophetic books” に彼が言及して生まれたものだ、と彼女は指摘しています。将にそうなのでしょうが、“Sibylline prophetic books” というのはどんなものでしょうか。 *The Oxford Classical Dictionary* をひきますと、

Sibylla. This word of uncertain etymology appears first in Heraclitus, and was early used as a proper name. As a single prophetic female the Sibyle (e. g. Ar. Pax 1095. 1116). As a single prophetic female the Sibyl was variously localized, and legends of her wanderings account for her presence at different spots, but as early as Heraclides Ponticus she became pluralized, and there after we find two, three, four, five, six, or ten Sibyls, in different and somebearing individual names, since the term Sibyl had now become generic . . .

The ecstatic character of Sibylline prophecy is described by Virgil, *Aen.* 6, 77-102. The content of such utterances was early reduced to written form, in Greek hexameter verses, the genuineness of which was often guaranteed by acrostics. They were originally, in the case of the Cumaean Sibyl, inscribed on palm-leaves collections of these verses were made for later consultation . . . After these Sibylline Books had been destroyed in the burning of the Capitol in 83 B. C.

a new collection was made from various sources to replace them . . .  
The influence of Jewish and Christian interpolations, however, combined with the prophecy of the Cumaean Sibyl in Virgil's *Fourth Eclogue* to give to all the Sibyls a position in Christian literature and art somewhat similar to that accorded the Old Testament Prophets.

元来のギリシャ神話にないこのような予言書を作り出したことはこの詩に広がりとして持たせています。キーツによれば、神々が存在する前に、“spirit” がいたのでしょうか。

この予言書の中にもどうしてタイタン族が没落するのかが書いていないと言ひ、さらに 139行目からは、

Not there, nor in sign, symbol, or portent  
Of element, earth, water, air, and fire—  
At war, at peace, or inter-quarreling  
One against one, or two, or three, or all  
Each several one against the other three  
As fire with air loud warring when rain-floods  
Drown both, and press them both against earth's face, (139-44)

ここで四元素のしくみの中にも見い出せないと言っています。M. アロットは、この註で、これはミルトンの『失樂園』第二巻、898-900(キーツが読んでいたミルトンの本にはこの箇所印がしてあります)の影響によると述べています。

. . . hot, cold, moist, and dry, four Champions fierce  
Strive here for Maistrie, and to Battel bring  
Thir embryon Atoms . . . (Paradise Lost II, 898-900)

確かに、この詩行はキーツの *Welcome Joy and Welcome Sorrow* のモットーとなっています。なるほど彼は直接にはミルトンの詩からこの表現を思いついたかもしれませんが、世界が熱いものと冷たいもの、湿ったものと乾いたものが互いに抗争状態にあるという認識は、遠く紀元前四世紀のギリ

シャにおいても行われていました。タレス、アナクシマンドロス、アナクシヌスらイオニア自然哲学者です。そしてエンペドクレスが地水火風をこの世の始源と言い出しました。

「まず聞け、万物の四つなる根（リゾーマ）を、輝くゼウス、命もたらすヘラ、アイドラウス、その涙もて死すべき者どもの泉を満たすネステイスを」。<sup>14)</sup>

この文章に田中美知太郎氏は次のような解釈をつけています。

「これはほかの個所で、彼自身が言っているように、火、水、土（大地）、空気の四元であり、古代末期のある学者の解釈しているように、彼の始源である。パルメニデスの一者はまず四つの始源に分裂してしまった。現象の多を説明するために。しかし現実の世界はさらに、『これら四元は常住交替し、やむときなし。ときに愛（ピロテース）により万物一に帰し、ときに争い（ネイコス）の力もて分裂し。』というぐあいである。すなわち、アリストテレス的用語をもってすれば、動力的な原理が『愛』と『争い』という形をとって、ここにはじめて明確に導入される。一つは結合の原理であり、他は分離のそれである。これらの力により四元が結合ないし、完全に分散することによっていわゆる諸物の生滅を、さらには、ものを構成する四元の移動から生じるそれらの構成比の変移から変化を説明するのである。．．．彼の四元もイオニア自然哲学におけるあたたかいものと冷たいもの、かわいたものと湿ったものに由来するのであり、アナクシマンドロスやアナクシメネスを思いおこさせる」。<sup>15)</sup>

キーツもミルトンも、かかる古代ギリシャの考え方を踏襲しているのです。

こうして理解に苦しむサターンは思慮深い海神、オーシェイナスに助けを求めます。

#### 註

1) 「ハイピアリアン」と「ハイピリアンの没落」の同一性と差異性——

(1) テーマについて—— *Osaka Literary Review*, 第11号(1972年), 78-88ページ

(2) 共通の詩行について

- その1, *O. L. R.* 第12号 (1973年), 55-66ページ。  
—その2, *O. L. R.* 第13号 (1974年), 49-60ページ。  
—その3, *O. L. R.* 第15号 (1976年), 64-78ページ。  
—その4, *O. L. R.* 第17号 (1978年), 61-70ページ。  
—その5, 二つの「ハイペリオン」におけるハイペリオンの描写について『イギリス・ロマン派研究』イギリスロマン派学会, 第3号 (1979年), 59-66ページ。
- 2) *The Poems of John Keats*, ed. by Miriam Allott (1st. ed; London: Longman, 1970), p.415.
  - 3) *The Poems of John Keats*, ed. by E. De Selincourt (8th ed; London: Methuen, 1961), p.581.
  - 4) M. Allott, P. 415. E. De Selincourt, p. 505.
  - 5) 「アポロによせるオード」は何編かありますが, 当該のは1815年2月に書かれたものです。
  - 6) Timothy Hilton: *Keats and His World* (London: Thames and Hudson, 1971), p.72.
  - 7) 呉茂一著『ギリシャ神話』(東京, 新潮社, 1964年), (上巻) 56ページ。神々の説明については, 呉茂一氏のこの書物と, *Hesiod: The Homeric Hymns and Homeric*, Translated by H. G Evelyn-white, Leob Classical Libray (London: William Heinemann, 1974)に負うところが大です。
  - 8) E. De Selincourt, p. 506.
  - 9) *ibid*, p.507.
  - 10) M. Allott, p.420. cf. E. De Selincourt, p.508.
  - 11) 呉茂一, 36ページ。
  - 12) M. Allott, P. 417.
  - 13) *ibid*, pp.423-4
  - 14) 『ギリシアの詩と哲学』田中美知太郎編, 平凡社, 思想の歴史1 (東京, 平凡社, 1965), 124ページ。
  - 15) 田中美知太郎, 124-5ページ。